2020年5月23日付茨城新聞

観光地、集客工夫の機会

いばらきの“次の一歩”
筑波総研リポート

筑波総研調査部長チーフエコノミスト
渋谷　康一郎

新型コロナウイルスに関する緊急事態宣言が茨城県を含む39県で解除されたことに伴い、茨城県では休業要請の一部緩和などを決定した。もっとも、首都圏からの移動や大規模イベントの自粛、遊興施設など一部業種への休業要請が続いている。茨城空港発着の国際・国内線も全て運休された。このため、感染症が終息するまでは観光関連事業者は厳しい経営が続くとみられる。ただ、各観光地の事業者にとって新型コロナ終息後のイベントやお祭りの再開を見据え、課題の克服や集客の工夫を検討するには絶好の機会であるとも言えるのではないか。

筆者は、7年間毎週末、県内各地を訪ね歩いたが、そうした中で他地域の参考になると思う事例をいくつか紹介したい。最初は笠間の陶炎祭（ひまつり）である。200組以上の陶芸家・窯元が手作りでお店を作り作品を販売する、訪問客が50万人を超えるイベントだ。注目すべき第一は渋滞対策である。JR常磐線友部駅と水戸線笠間駅からシャトルバスを運行する一方、マイカー来訪者には無料の大規模臨時駐車場などを設け、陶炎祭会場間に無料シャトルバスを運行して動線を分離している。特に、両者の動線が唯一重なる会場入り口の道路では、警備員が反対車線の通行を一時的に止めてバスを優先的に通している。第二に陶炎祭への来訪者が笠間市内の他地区や県外のイベントに流れるよう地域一帯で取り組んでいることである。県陶芸美術館の特別展や笠間日動美術館の企画展とタイアップし、これらと笠間稲荷神社などを巡る周遊バス、笠間つつじ公園のつつじまつりとを結ぶ送迎バス、同時期開催の益子陶器市との間を結ぶ臨時バスが期間中運行される。

次は真壁のひなまつりである。真壁中心市街の店舗や民家約160軒にお雛様（ひなさま）が展示され、訪問客も10万人を超えるイベントだ。注目すべき第一は、ひなまつりマップの工夫である。マップには真壁の街を四つのエリアに分け、雛人形の展示場所と種類・年代、お食事処（どころ）、食べ歩きの総菜やお土産売り場、トイレ等の場所が記されている。さらに、マップの上部には山並みの形が表示され、歩きながらこれを実際の山並みに合わせると、自分が今どこにいるのか非常に分かりやすく、工夫されている。第二に「おもてなし」の心である。各店舗の入り口を開け放つとともに、お茶や甘酒などを振る舞い、気楽に店主などと話ができる雰囲気づくりがなされている。ソフト面の一工夫で課題解決の糸口を探りたい。

（次回は7月25日掲載）